

A3



JP7208151

Biblio

Page 1

Drawing



## EXHAUST EMISSION CONTROL DEVICE OF INTERNAL COMBUSTION ENGINE

Patent Number: JP7208151  
Publication date: 1995-08-08  
Inventor(s): KATO KENJI; others: 03  
Applicant(s): TOYOTA MOTOR CORP  
Requested Patent: ☐ JP7208151  
Application Number: JP19940007744 19940127  
Priority Number(s):  
IPC Classification: F01N3/18; F01N3/08; F02B77/08; F02D45/00; G01M15/00  
EC Classification:  
Equivalents: JP2888124B2

### Abstract

**PURPOSE:** To provide an exhaust emission control device of an internal combustion engine which can detect the deterioration of an NOX absorbent accurately depending on the density on the downstream side of the absorbent after reopening the absorption, after the NOX is discharged once.

**CONSTITUTION:** At an exhaust gas passage 17 on the downstream side of an NOX absorbent 18, an NOX sensor 20 to detect the NOX density in the exhaust gas is provided, and it is decided that the NOX absorbent 18 is deteriorated at the time the output of the NOX sensor 20 is raised to a specific value after finishing the regeneration of the NOX absorbent is preliminary decided given time or less.

Data supplied from the esp@cenet database - I2

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-208151

(43) 公開日 平成7年(1995)8月8日

(51) Int.Cl.*	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
F 0 1 N 3/18	Z A B C			
3/08	Z A B A			
F 0 2 B 77/08	G			
F 0 2 D 45/00	3 6 8 Z			
G 0 1 M 15/00	Z			

審査請求 未請求 請求項の数8 O L (全 11 頁)

(21) 出願番号 特願平6-7744

(22) 出願日 平成6年(1994)1月27日

(71) 出願人 000003207

トヨタ自動車株式会社

愛知県豊田市トヨタ町1番地

(72) 発明者 加藤 健治

愛知県豊田市トヨタ町1番地 トヨタ自動車株式会社内

(72) 発明者 木原 哲郎

愛知県豊田市トヨタ町1番地 トヨタ自動車株式会社内

(72) 発明者 浅沼 孝充

愛知県豊田市トヨタ町1番地 トヨタ自動車株式会社内

(74) 代理人 弁理士 石田 敬 (外3名)

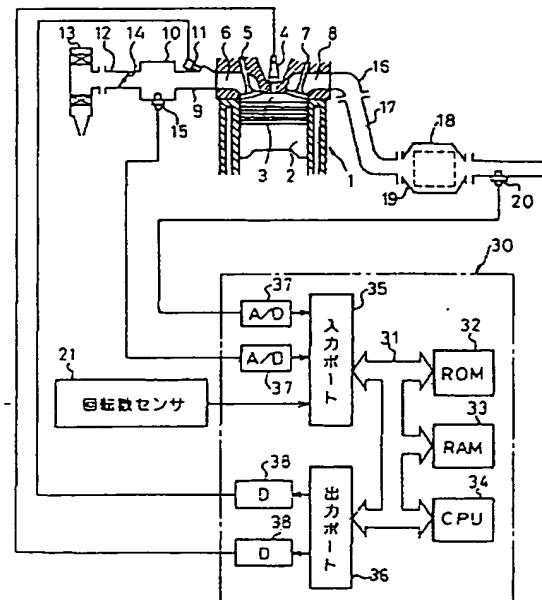
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 内燃機関の排気浄化装置

(57) 【要約】

【目的】 NO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化を正確に検出することが可能な内燃機関の排気浄化装置を提供する。

【構成】 NO<sub>x</sub> 吸収剤18下流側の排気通路17に排気中のNO<sub>x</sub> 濃度を検出するNO<sub>x</sub> センサ20を配置し、NO<sub>x</sub> 吸収剤の再生終了後、NO<sub>x</sub> センサ20の出力が所定値まで上昇するまでの時間が予め定めた所定時間以下の場合にNO<sub>x</sub> 吸収剤18が劣化したと判定する。



1...内燃機関 20...NO<sub>x</sub> センサ  
17...排気通路 30...制御回路  
18...NO<sub>x</sub> 吸収剤

## 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 内燃機関の排気通路に配置された、流入する排気空燃比がリーンのときに  $\text{NO}_x$  を吸収し、流入する排気の酸素濃度が低下したときに吸収した  $\text{NO}_x$  を放出する  $\text{NO}_x$  吸収剤と、

前記  $\text{NO}_x$  吸収剤下流側の排気通路に配置され、排気中の  $\text{NO}_x$  濃度を検出する  $\text{NO}_x$  センサと、

前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が吸収した  $\text{NO}_x$  の放出を終了して  $\text{NO}_x$  吸収を再開した後の  $\text{NO}_x$  吸収剤下流側  $\text{NO}_x$  濃度の時間的変化に基づいて、前記  $\text{NO}_x$  吸収剤の劣化の有無を判定する劣化検出手段とを備えた内燃機関の排気浄化装置。

【請求項 2】 前記劣化検出手段は、前記  $\text{NO}_x$  吸収剤の前記  $\text{NO}_x$  吸収再開後に前記  $\text{NO}_x$  濃度が所定値以上になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に、前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が劣化したと判定する請求項 1 に記載の排気浄化装置。

【請求項 3】 前記劣化検出手段は、前記  $\text{NO}_x$  吸収剤下流側の  $\text{NO}_x$  濃度の増加速度の変化率を検出する手段を備え、前記  $\text{NO}_x$  吸収再開後に前記  $\text{NO}_x$  濃度が所定値以上で、かつ前記  $\text{NO}_x$  濃度増加速度の変化率が負になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が劣化したと判定する請求項 1 に記載の排気浄化装置。

【請求項 4】 内燃機関の排気通路に配置された、流入する排気空燃比がリーンのときに  $\text{NO}_x$  を吸収し、流入する排気の酸素濃度が低下したときに吸収した  $\text{NO}_x$  を放出する  $\text{NO}_x$  吸収剤と、

前記  $\text{NO}_x$  吸収剤下流側の排気通路に配置され、排気中の  $\text{NO}_x$  濃度を検出する下流側  $\text{NO}_x$  センサと、

前記  $\text{NO}_x$  吸収剤上流側の排気中の  $\text{NO}_x$  濃度を検出する上流側  $\text{NO}_x$  濃度検出手段と、

前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が吸収した  $\text{NO}_x$  の放出を終了して  $\text{NO}_x$  吸収を再開した後の  $\text{NO}_x$  吸収剤下流側  $\text{NO}_x$  濃度と  $\text{NO}_x$  吸収剤上流側  $\text{NO}_x$  濃度との関係の時間的変化に基づいて、前記  $\text{NO}_x$  吸収剤の劣化の有無を判定する劣化検出手段とを備えた内燃機関の排気浄化装置。

【請求項 5】 前記劣化検出手段は、前記上流側  $\text{NO}_x$  濃度と前記下流側  $\text{NO}_x$  濃度との差を演算する手段を備え、前記  $\text{NO}_x$  吸収再開後に前記  $\text{NO}_x$  濃度の差が所定値以下になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が劣化したと判定する請求項 4 に記載の排気浄化装置。

【請求項 6】 前記劣化検出手段は、前記下流側  $\text{NO}_x$  濃度と前記上流側  $\text{NO}_x$  濃度との比を演算する手段を備え、前記  $\text{NO}_x$  吸収再開後に前記  $\text{NO}_x$  濃度の比が所定値以上になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記  $\text{NO}_x$  吸収剤が劣化したと判定する請求項 4 に記載の排気浄化装置。

【請求項 7】 前記上流側  $\text{NO}_x$  濃度検出手段は、前記

$\text{NO}_x$  吸収剤上流側の排気通路に設けられた  $\text{NO}_x$  センサからなる請求項 4 から 6 のいずれか 1 項に記載の排気浄化装置。

【請求項 8】 前記上流側  $\text{NO}_x$  濃度検出手段は、前記機関の運転状態を検出する手段と、検出された運転状態に基づいて、予め定められた関係から上流側  $\text{NO}_x$  濃度を演算する手段とを備えた請求項 4 から 6 のいずれか 1 項に記載の排気浄化装置。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、流入する排気空燃比がリーンのときに排気中の  $\text{NO}_x$  を吸収し、排気酸素濃度が低下したときに吸収した  $\text{NO}_x$  を放出する  $\text{NO}_x$  吸収剤を用いた内燃機関の排気浄化装置に関し、詳細には上記  $\text{NO}_x$  吸収剤の劣化を正確に検出することのできる内燃機関の排気浄化装置に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 この種の  $\text{NO}_x$  吸収剤を用いた内燃機関の排気浄化装置としては、国際公開公報第 WO 93-7363 号に記載されたものがある。上記の排気浄化装置では、流入する排気空燃比がリーンのときに排気中の  $\text{NO}_x$  を吸収し、流入する排気中の酸素濃度が低下したときに吸収した  $\text{NO}_x$  を放出する  $\text{NO}_x$  吸収剤を内燃機関の排気通路に配置し、通常は内燃機関をリーン空燃比で運転して上記  $\text{NO}_x$  吸収剤に排気中の  $\text{NO}_x$  を吸収させる。また、 $\text{NO}_x$  吸収剤の  $\text{NO}_x$  吸収量が增大すると  $\text{NO}_x$  吸収剤の  $\text{NO}_x$  吸収能力が低下するため、リーン空燃比運転が一定の時間続き、 $\text{NO}_x$  吸収剤の吸収した  $\text{NO}_x$  量が増大した場合には、内燃機関の運転空燃比を短時間リーン空燃比からリッチ又は理論空燃比に切り換えて排気中の酸素濃度を低下させ、 $\text{NO}_x$  吸収剤から吸収した  $\text{NO}_x$  を放出させるとともに、この放出された  $\text{NO}_x$  を排気中の未燃 HC、CO 等の成分により還元浄化するようにしている（本明細書では、上記  $\text{NO}_x$  吸収剤からの  $\text{NO}_x$  の放出と還元、浄化の操作を、「 $\text{NO}_x$  吸収剤の再生」と呼ぶ）。このように一定時間毎に  $\text{NO}_x$  吸収剤の再生を行うことにより、 $\text{NO}_x$  吸収剤の  $\text{NO}_x$  吸収能力が回復して  $\text{NO}_x$  の浄化能力が高く維持される。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】 上記のように、 $\text{NO}_x$  吸収剤は排気空燃比に応じて流入する排気中の  $\text{NO}_x$  の吸収と放出、還元を交互に行い、排気中の  $\text{NO}_x$  を浄化する。しかし、上記の  $\text{NO}_x$  吸収剤は排気通路に配置され高温の排気に曝される等過酷な条件で使用されるため使用中に劣化が生じる場合がある。例えば、後述するように  $\text{NO}_x$  吸収剤中の触媒（白金 Pt 等）の劣化や、吸収材（例えば酸化バリウム BaO 等）の硫酸塩毒や熱劣化などにより  $\text{NO}_x$  吸収剤に劣化を生じると、 $\text{NO}_x$  吸収剤の浄化能力が低下するため、排気中の  $\text{NO}_x$  が浄化

されないまま大気に放出されるようになる。このため、NO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を判定して劣化したNO<sub>x</sub> 吸収剤を早期に交換、被毒回復等の処置をとることが必要とされる。

【0004】ところで、NO<sub>x</sub> 吸収剤と同様に排気通路に配置され、同様に排気の浄化を行うものとしては従来より三元触媒が知られている。また、三元触媒も、使用中に同様に劣化するため三元触媒の劣化の検出方法が種々考案されている。これらの劣化検出方法は三元触媒のO<sub>2</sub> ストレージ作用の低下を検出することにより触媒の劣化を判定している（例えば、特開平3-331810号参照）。

【0005】ところが、NO<sub>x</sub> 吸収剤は三元触媒とはNO<sub>x</sub> の浄化のメカニズムが異なり、また三元触媒のようなO<sub>2</sub> ストレージ効果を有していないため、三元触媒の劣化検出と同様な方法ではNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化を検出することはできず、正確にNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化を検出することは困難であった。本発明は、上記問題に鑑みNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を正確に判定することが可能な手段を提供することを目的としている。

【0006】

【課題を解決するための手段】請求項1に記載の本発明によれば、内燃機関の排気通路に配置された、流入する排気空燃比がリーンのときにNO<sub>x</sub> を吸収し、流入する排気の酸素濃度が低下したときに吸収したNO<sub>x</sub> を放出するNO<sub>x</sub> 吸収剤と、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側の排気通路に配置され、排気中のNO<sub>x</sub> 濃度を検出するNO<sub>x</sub> センサと、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が吸収したNO<sub>x</sub> の放出を終了してNO<sub>x</sub> 吸収を再開した後の、NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側NO<sub>x</sub> 濃度の時間的変化に基づいて前記NO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を判定する劣化検出手段とを備えた内燃機関の排気浄化装置が提供される。

【0007】また、請求項2に記載の本発明によれば、前記劣化検出手段は、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤のNO<sub>x</sub> 吸収再開後に前記NO<sub>x</sub> 濃度が所定値以上になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が劣化したと判定する。また、請求項3に記載の本発明によれば、請求項1の前記劣化検出手段は、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側のNO<sub>x</sub> 濃度増加速度の変化率を検出する手段を備え、前記NO<sub>x</sub> 吸収再開後に前記NO<sub>x</sub> 濃度が所定値以上で、かつ前記NO<sub>x</sub> 濃度の増加速度変化率が負になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が劣化したと判定する。

【0008】また、請求項4に記載の本発明によれば、内燃機関の排気通路に配置された、流入する排気空燃比がリーンのときにNO<sub>x</sub> を吸収し、流入する排気の酸素濃度が低下したときに吸収したNO<sub>x</sub> を放出するNO<sub>x</sub> 吸収剤と、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側の排気通路に配置され、排気中のNO<sub>x</sub> 濃度を検出する下流側NO<sub>x</sub> センサ

と、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤上流側の排気中のNO<sub>x</sub> 濃度を検出する上流側NO<sub>x</sub> 濃度検出手段と、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が吸収したNO<sub>x</sub> の放出を終了してNO<sub>x</sub> 吸収を再開した後の、NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側NO<sub>x</sub> 濃度とNO<sub>x</sub> 吸収剤上流側NO<sub>x</sub> 濃度との関係の時間的変化に基づいて前記NO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を判定する劣化検出手段とを備えた内燃機関の排気浄化装置が提供される。

【0009】さらに、請求項5に記載の本発明では、請求項4の前記劣化検出手段は、前記上流側NO<sub>x</sub> 濃度と前記下流側NO<sub>x</sub> 濃度との差を演算する手段を備え、前記NO<sub>x</sub> 吸収再開後に前記NO<sub>x</sub> 濃度の差が所定値以下になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が劣化したと判定する。また、請求項6に記載の本発明では、請求項4の前記劣化検出手段は、前記下流側NO<sub>x</sub> 濃度と前記上流側NO<sub>x</sub> 濃度との比を演算する手段を備え、前記NO<sub>x</sub> 吸収再開後に前記NO<sub>x</sub> 濃度の比が所定値以上になるまでの時間が予め定められた所定時間以下である場合に前記NO<sub>x</sub> 吸収剤が劣化したと判定する。

【0010】また、請求項7に記載の本発明では、請求項4から6のいずれかに記載した排気浄化装置において、前記上流側NO<sub>x</sub> 濃度検出手段は、前記NO<sub>x</sub> 吸収剤上流側の排気通路に設けられたNO<sub>x</sub> センサからなっている。さらに、請求項8に記載の本発明では、請求項4から6のいずれかに記載した排気浄化装置において、前記上流側NO<sub>x</sub> 濃度検出手段は、前記機関の運転状態を検出する手段と、検出された運転状態に基づいて、予め定められた関係から上流側NO<sub>x</sub> 濃度を演算する手段とを備えている。

【0011】

【作用】以下、図1を用いて本発明の作用を説明する。図1(A) から(C) において、各図の横軸は時間を示し、図1(A) は内燃機関の空燃比の変化を、図1(B) はNO<sub>x</sub> 吸収剤に流入する排気（NO<sub>x</sub> 吸収剤上流側排気）中のNO<sub>x</sub> 濃度を、図1(C) はNO<sub>x</sub> 吸収剤を通過した排気（NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側排気）中のNO<sub>x</sub> 濃度をそれぞれ示している。

【0012】図1は、前述の国際公開公報第WO93-7363号に記載された排気浄化装置と同様のNO<sub>x</sub> 吸収剤再生操作を行う場合を示し、通常時はリーン空燃比（例えば空燃比2.3程度）の運転を行い、一定期間毎に短時間機関空燃比をリッチに切換えてNO<sub>x</sub> 吸収剤の再生を行う（図1(A) 参照）。また、図1は説明のため、運転条件が一定に保たれた場合について示している。

【0013】このように空燃比を変化させた場合、図1(B) に示すように、NO<sub>x</sub> 吸収剤上流側の排気NO<sub>x</sub> 濃度は機関空燃比がリッチに切換えられた時（図1区間I）に短時間増大するが、リーン空燃比運転が行われている期間では略一定の値になる。また、図1(C) は上記のように機関空燃比を変化させた場合のNO<sub>x</sub> 吸収剤下

流側の排気NO<sub>x</sub>濃度変化のNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化の有無による相違を示しており、図1(C)の実線はNO<sub>x</sub>吸収剤が正常な場合を、点線はNO<sub>x</sub>吸収剤が劣化した場合をそれぞれ示している。

【0014】NO<sub>x</sub>吸収剤は後述するメカニズムにより排気空燃比がリーンのときに排気中のNO<sub>x</sub>を吸収し、排気空燃比がリッチ（排気酸素濃度が低下）したときに吸収したNO<sub>x</sub>を放出する。また、NO<sub>x</sub>吸収剤の再生（図1区間II）終了後はNO<sub>x</sub>吸収剤に吸収されたNO<sub>x</sub>が放出されたためにNO<sub>x</sub>吸収剤のNO<sub>x</sub>吸収能力は高くなっており、NO<sub>x</sub>吸収剤に流入する排気中のNO<sub>x</sub>の殆どがNO<sub>x</sub>吸収剤に吸収されて下流側排気のNO<sub>x</sub>濃度（図1(C)）は上流側（図1(B)）に較べて大幅に低くなる。

【0015】しかし、NO<sub>x</sub>吸収剤中に吸収されたNO<sub>x</sub>量が増大してNO<sub>x</sub>吸収剤の吸収可能な最大NO<sub>x</sub>量（飽和量）に近づくにつれてNO<sub>x</sub>吸収剤のNO<sub>x</sub>吸収能力が低下するため、流入する排気中のNO<sub>x</sub>のうちNO<sub>x</sub>吸収剤に吸収されずに下流側に流出するNO<sub>x</sub>量が増大し、再生終了後ある程度の時間が経過すると下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度は上昇を始め、上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度に漸近するようになる。

【0016】ところが、NO<sub>x</sub>吸収剤が劣化すると、NO<sub>x</sub>吸収剤の飽和量が低下してくるため、NO<sub>x</sub>吸収剤が正常な場合に較べて少ないNO<sub>x</sub>吸収量でNO<sub>x</sub>吸収剤の吸収能力が低下するようになる。このため、NO<sub>x</sub>吸収剤劣化時（図1(C)点線）には、正常時（図1(C)実線）に較べて再生終了後に下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度が増大するまでの時間が短くなる。

【0017】本発明は、このNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化の有無による下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度の時間的変化の相違を検出することにより、NO<sub>x</sub>吸収剤の劣化の判定を行うものである。すなわち、本発明では、劣化検出手段によりNO<sub>x</sub>吸収剤下流側にNO<sub>x</sub>センサを配置して、NO<sub>x</sub>吸収剤再生（区間II）終了後のNO<sub>x</sub>濃度の変化を監視し、下流側排気のNO<sub>x</sub>濃度変化が図1(C)の点線のような変化を示した場合にNO<sub>x</sub>吸収剤が劣化したと判定する。

【0018】また、上記のように下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度変化が図1(C)に点線で示したような状態になったことを客観的に判断するため、劣化検出手段は、例えばNO<sub>x</sub>吸収剤の再生（区間II）終了後、NO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度が所定値（図1(C)のN<sub>1</sub>）に達するまでの時間t<sub>1</sub>（図1(C)）、または再生終了後、下流側NO<sub>x</sub>濃度の増加速度の変化率が正から負に変化する変曲点（図1(C)のA点）に到達するまでの時間t<sub>2</sub>（図1(C)）をNO<sub>x</sub>吸収剤劣化を表すパラメータとして用いて、t<sub>1</sub>またはt<sub>2</sub>が予め定めた所定の基準時間以下になった時にNO<sub>x</sub>吸収剤が劣化したと判断する。

【0019】また、運転条件の変化等によりNO<sub>x</sub>吸収剤に流入する排気中のNO<sub>x</sub>濃度が変化すると、NO<sub>x</sub>吸収剤の状態が同一であっても下流側の排気中のNO<sub>x</sub>濃度は変動する。このため、NO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気のNO<sub>x</sub>濃度の変化だけでなく、上流側排気のNO<sub>x</sub>濃度の変化をも考慮することにより更に正確にNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化を判定することができる。

【0020】請求項4から8に記載の本発明では、下流側NO<sub>x</sub>センサに加えてNO<sub>x</sub>吸収剤上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度を検出する手段を設け、再生終了後のNO<sub>x</sub>吸収剤の下流側NO<sub>x</sub>濃度と上流側NO<sub>x</sub>濃度との関係の時間的変化に基づいてNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化を検出する。すなわち、NO<sub>x</sub>吸収剤の吸収能力は、流入する排気中のNO<sub>x</sub>のうちどれだけのNO<sub>x</sub>を吸収できるかで表されるため、再生後の上流側NO<sub>x</sub>濃度と下流側NO<sub>x</sub>濃度との関係の時間的変化からNO<sub>x</sub>吸収剤の吸収能力を求め、NO<sub>x</sub>吸収剤の吸収能力が一定の値より低下するまでの時間によりNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化の有無を検出するようにしている。

【0021】例えば、上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度と下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度との差が所定値以下になるまでの時間、または下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度と上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度との比が所定値以上になるまでの時間をNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化を表すパラメータとして用いて、この時間が予め定めた基準時間以下になったときにNO<sub>x</sub>吸収剤が劣化したと判断される。

【0022】また、NO<sub>x</sub>吸収剤上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度は、すなわち機関から排出される排気のNO<sub>x</sub>濃度であるため機関の回転数、負荷等の機関運転条件に依存する。このため、NO<sub>x</sub>吸収剤上流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度を、NO<sub>x</sub>吸収剤上流側排気通路にNO<sub>x</sub>センサを設けて直接検出する他、予め実測などにより機関の各運転条件における排気中のNO<sub>x</sub>濃度を求めておき、機関の運転条件から間接的に求めることができる。

【0023】

【実施例】以下添付図面を用いて本発明の実施例について説明する。図2は本発明の排気浄化装置を適用した内燃機関の全体図である。図2において1はリーン空燃比の燃焼を行うガソリンエンジン等の内燃機関、3は機関1の燃焼室、6は機関の吸気ポート、8は排気ポートを示す。各吸気ポート6は吸気枝管9を介してサージタンク10に接続されるとともに、各枝管9にはそれぞれの吸気ポート6に燃料を噴射する燃料噴射弁11が配置されている。

【0024】また、サージタンク10は吸気通路12を介してエアクリーナ13に接続され、吸気通路12内には運転者のアクセルペダル（図示せず）の操作に応じた開度をとるスロットル弁14が配置されている。また、サージタンク10にはサージタンク10内の絶対圧力に比例した出力電圧を発生する吸気圧センサ15が設けら

れている。

【0025】一方、機関1の排気ポート8は排気マニホールド16を介して排気通路17に接続されており、排気通路17には後述するNO<sub>x</sub>吸収剤18を内蔵したケーシング19が接続されている。また、図2に20で示すのは、NO<sub>x</sub>吸収剤18の下流側の排気通路に設けられた、排気中のNO<sub>x</sub>濃度を検出するNO<sub>x</sub>センサである。

【0026】図2に30で示すのは、機関1の電子制御回路である。電子制御回路30はROM（リードオンリメモリ）32、RAM（ランダムアクセスメモリ）33、CPU（マイクロプロセッサ）34、入力ポート35、出力ポート36をそれぞれ双方向性バス31で接続した、公知の構成のデジタルコンピュータからなり、機関1の燃料噴射量制御、点火時期制御等の機関の基本制御を行うほか、本実施例ではNO<sub>x</sub>吸収剤18の劣化を検出する劣化検出手段としての役割を果たしている。

【0027】上記目的のため、制御回路30の入力ポート35には、吸気圧センサ15からの吸気圧力に応じた電圧信号と、NO<sub>x</sub>センサ20からNO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度を表す電圧信号がそれぞれAD変換器37を介して入力されている他、機関のディストリビュータ（図示せず）に設けられた機関回転数センサ21から機関回転数を表すパルス信号が入力されている。

【0028】また、制御回路30の出力ポート36は、それぞれ対応する駆動回路38を介して燃料噴射弁11と点火プラグ4とに接続され、燃料噴射弁11からの燃料噴射と機関の点火時期とを制御している。ケーシング19に内蔵されたNO<sub>x</sub>吸収剤18は、例えばアルミナ等の担体を使用し、この担体上に例えばカリウムK、ナトリウムNa、リチウムLi、セシウムCsのようなアルカリ金属、バリウムBa、カルシウムCaのようなアルカリ土類、ランタンLa、イットリウムYのような希土類から選ばれた少なくとも一つと、白金Ptのような貴金属とが担持された構成とされる。このNO<sub>x</sub>吸収剤18は流入する排気空燃比がリーンの場合にはNO<sub>x</sub>を吸収し、酸素濃度が低下するとNO<sub>x</sub>を放出するNO<sub>x</sub>の吸放出作用を行う。

【0029】なお、上述の排気空燃比とは、ここではNO<sub>x</sub>吸収剤18の上流側の排気通路や機関燃焼室、吸気通路等にそれぞれ供給された空気量の合計と燃料の合計との比を意味するものとする。従って、NO<sub>x</sub>吸収剤18の上流側排気通路に燃料または空気が供給されない場合には、排気空燃比は機関の空燃比（機関燃焼室内の燃焼における空燃比）と等しくなる。

【0030】本実施例ではリーン空燃比の燃焼を行う機関が使用されているため、通常運転時の排気空燃比はリーンであり、NO<sub>x</sub>吸収剤18は排気中のNO<sub>x</sub>の吸収を行う。また、機関の空燃比がリーン空燃比からリッチ又は理論空燃比に切り換えられて排気中の酸素濃度が低

下すると、NO<sub>x</sub>吸収剤18は吸収したNO<sub>x</sub>の放出を行う。

【0031】この吸放出作用の詳細なメカニズムについては明らかでない部分もある。しかし、この吸放出作用は図3に示すようなメカニズムで行われているものと考えられる。次にこのメカニズムについて担体上に白金PtおよびバリウムBaを担持させた場合を例にとって説明するが、他の貴金属、アルカリ金属、アルカリ土類、希土類を用いても同様なメカニズムとなる。

【0032】すなわち、流入排気はかなりリーンになると流入排気中の酸素濃度が大幅に増大し、図3(A)に示されるようにこれら酸素O<sub>2</sub>がO<sub>2</sub><sup>·</sup>またはO<sub>2</sub><sup>2·</sup>の形で白金Ptの表面に付着する。一方、機関からはNO<sub>x</sub>は大部分がNOの形で排出されるが、NO<sub>x</sub>吸収剤に流入する排気中のNOは白金Ptの表面上でこのO<sub>2</sub><sup>·</sup>またはO<sub>2</sub><sup>2·</sup>と反応し、NO<sub>2</sub>となる（2NO+O<sub>2</sub>→2NO<sub>2</sub>）。次いで生成されたNO<sub>2</sub>の一部は白金Pt上で酸化されつつ吸収剤内に吸収されて酸化バリウムBaOと結合しながら、図3(A)に示されるように硝酸イオンNO<sub>3</sub><sup>·</sup>の形で吸収剤内に拡散する。このようにしてNO<sub>x</sub>がNO<sub>x</sub>吸収剤18内に吸収される。

【0033】従って、流入排気中の酸素濃度が高い限り白金Ptの表面でNO<sub>2</sub>が生成され、吸収剤のNO<sub>x</sub>吸収能力が飽和しない限りNO<sub>2</sub>が吸収剤内に吸収されて硝酸イオンNO<sub>3</sub><sup>·</sup>が生成される。これに対して機関1の空燃比がリッチ又は理論空燃比に切り換えられると、流入排気中の酸素濃度が低下してNO<sub>2</sub>の生成量が減少する。これにより反応は逆方向（NO<sub>3</sub><sup>·</sup>→NO<sub>2</sub>）に進み、吸収剤内の硝酸イオンNO<sub>3</sub><sup>·</sup>がNO<sub>2</sub>の形で吸収剤から放出される。

【0034】一方、流入排気中に未燃HC、CO等の成分が存在すると、これらの成分は白金Pt上の酸素O<sub>2</sub><sup>·</sup>またはO<sub>2</sub><sup>2·</sup>と反応して酸化され、白金Pt上の酸素を消費する。また、NO<sub>x</sub>吸収剤18から放出されたNO<sub>2</sub>は図3(B)に示すようにHC、COと反応して還元される。このようにして白金Ptの表面上にNO<sub>2</sub>が存在しなくなると吸収剤から次から次へとNO<sub>2</sub>が放出される。

【0035】すなわち、流入排気中のHC、COは、まず白金Pt上のO<sub>2</sub><sup>·</sup>またはO<sub>2</sub><sup>2·</sup>とただちに反応して酸化され、次いで白金Pt上のO<sub>2</sub><sup>·</sup>またはO<sub>2</sub><sup>2·</sup>が消費されてもまだHC、COが残っていればこのHC、COによって吸収剤から放出されたNO<sub>x</sub>、および排気とともに流入するNO<sub>x</sub>が還元される。本実施例では、制御回路30は前述の国際公開公報第WO93-7363号と同様に、リーン空燃比運転が一定期間継続してNO<sub>x</sub>吸収剤18のNO<sub>x</sub>吸収量が増大したときに燃料噴射量を増量して、短時間機関空燃比をリッチ空燃比に切り換えることにより排気中の酸素濃度を低下させるとともに排気中の未燃HC、CO成分を増加させて上記NO<sub>x</sub>吸収

剤からのNO<sub>x</sub>の放出と還元浄化とを行っている。

【0036】ところが、NO<sub>x</sub>吸収剤が種々の原因で劣化すると上記のNO<sub>x</sub>の吸放出作用が低下するため、浄化されずにNO<sub>x</sub>吸収剤下流側に流出するNO<sub>x</sub>量が増大するようになる。NO<sub>x</sub>吸収剤の劣化は、上記白金Pt等の触媒作用の低下と、吸収剤BaO等のNO<sub>x</sub>吸収容量の低下により生じる。例えば、白金Ptの触媒作用の低下は熱劣化などにより生じ、触媒作用が低下すると流入する排気中のNOの酸化反応( $2\text{NO} + \text{O}_2 \rightarrow 2\text{NO}_2$ )が低下してNO<sub>2</sub>が生成されなくなる。この場合、NOはそのままでは吸収剤BaOに吸収されないため、NO<sub>x</sub>吸収剤をそのまま通過して下流側に流出する。このため、白金Ptが劣化すると正常な場合に比べてNO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気中のNO濃度が増大することになる。

【0037】また、吸収剤BaOの吸収容量の低下は例えば熱劣化、硫黄被毒などにより生じる。例えば、機関排気中には微量の硫黄酸化物(SO<sub>x</sub>)が含まれるが、排気中のSO<sub>x</sub>は上述のNO<sub>x</sub>の吸収と同じメカニズムでNO<sub>x</sub>吸収剤に吸収されるため、NO<sub>x</sub>吸収剤に吸収されたSO<sub>x</sub>によりNO<sub>x</sub>吸収剤の硫黄被毒が生じる場合がある。すなわち、排気空燃比がリーンのとき排気中のSO<sub>x</sub>(例えばSO<sub>2</sub>)は白金Pt上で酸化されてSO<sub>3</sub>・、SO<sub>4</sub>・となり、酸化バリウムBaOと結合してBaSO<sub>4</sub>を形成する。ところが、BaSO<sub>4</sub>は比較的安定であり、また、結晶が粗大化しやすいため一旦生成されると分解放出されにくい。このため、吸収されたSO<sub>x</sub>は通常のNO<sub>x</sub>吸収剤の再生操作では放出されずにNO<sub>x</sub>吸収剤内に蓄積される傾向がある。このようにNO<sub>x</sub>吸収剤中のBaSO<sub>4</sub>の生成量が増大するとNO<sub>x</sub>の吸収に関与できるBaOの量が減少してしまい、NO<sub>x</sub>の吸収容量が低下してしまう、いわゆる硫黄被毒(またはSO<sub>x</sub>被毒)が生じるのである。また、NO<sub>x</sub>吸収剤を長時間使用して高温により吸収剤BaO自体が劣化したような場合にも上記の硫黄被毒と同様に吸収容量が低下する場合がある。

【0038】このようにNO<sub>x</sub>吸収剤のNO<sub>x</sub>吸収容量が低下したような場合、白金Ptが正常であれば流入する排気中のNOの酸化反応( $2\text{NO} + \text{O}_2 \rightarrow 2\text{NO}_2$ )は正常に行われるものの、NO<sub>x</sub>吸収剤がすぐにNO<sub>x</sub>で飽和してしまい、生成したNO<sub>2</sub>を吸収できなくなるため白金Pt上で生成したNO<sub>2</sub>は吸収剤に吸収されないまま下流側に流出するようになり、この場合もNO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気中のNO<sub>2</sub>濃度が増大するようになる。

【0039】従って、NO<sub>x</sub>吸収剤が劣化するといずれの場合も再生終了後短時間でNO<sub>x</sub>吸収剤下流側排気中のNO<sub>x</sub>(NOまたはNO<sub>2</sub>)が増大するようになるため、前述のように再生終了後のNO<sub>x</sub>吸収剤下流側の排気NO<sub>x</sub>濃度の変化を監視することによりNO<sub>x</sub>吸収

剤の劣化を検出することができる。本実施例では、NO<sub>x</sub>吸収剤18下流側排気通路に設けたNO<sub>x</sub>センサ20により下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度を監視し、NO<sub>x</sub>吸収剤18の劣化の有無を判定している。

【0040】排気中のNO<sub>x</sub>成分濃度を検出するNO<sub>x</sub>センサとしては種々のタイプがあるが、本実施例では、排気中のNO<sub>x</sub>成分濃度をリアルタイムで検出しNO<sub>x</sub>成分濃度に応じた電気信号を発生することが可能なタイプのNO<sub>x</sub>センサであれば使用することができる。この種のNO<sub>x</sub>センサとしては、例えばチタニア(酸化チタン)を主成分とするN型酸化物半導体セラミックスを検出素子として用いたセンサがある。この半導体型センサは、排気中のNO<sub>x</sub>(NOまたはNO<sub>2</sub>)がセンサ表面に吸着される際に素子セラミックス中の電子を捕捉することにより生じる電気抵抗値の変化から排気中のNO<sub>x</sub>濃度を検出するタイプのものである次に、上記NO<sub>x</sub>センサ20の出力を用いたNO<sub>x</sub>吸収剤18の劣化判定操作について説明する。

【0041】図4は制御回路30により一定時間毎に実行されるNO<sub>x</sub>吸収剤劣化判定ルーチンのフローチャートの一例を示す。前述のように、NO<sub>x</sub>吸収剤が劣化するとNO<sub>x</sub>吸収剤再生終了後短時間で下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度が増大するようになる。本実施例では、再生終了後下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度が一定レベルに上昇するまでの時間によりNO<sub>x</sub>吸収剤の劣化の有無を判定している。

【0042】図4においてルーチンがスタートすると、ステップ401では現在NO<sub>x</sub>吸収剤18の再生操作が実行中か否かが判定され、再生操作が実行中であればステップ403に進みカウンタCをクリアしてルーチンを終了する。また、ステップ401で再生操作実行中でない場合にはステップ405に進みカウンタCの値をプラス1カウントアップする。本ルーチンは一定時間間隔で実行されるため、これによりカウンタCの値は、NO<sub>x</sub>吸収剤18の再生操作終了時からの経過時間に対応した値となる。

【0043】次いで、ステップ407ではNO<sub>x</sub>センサ20からNO<sub>x</sub>吸収剤18下流側排気中のNO<sub>x</sub>濃度NRが読み込まれ、ステップ409では上記NO<sub>x</sub>濃度NRが所定値N<sub>1</sub>(図1(C)参照)以上であるか否かが判定され、NR < N<sub>1</sub>の場合はそのままルーチンを終了する。また、ステップ409でNR ≥ N<sub>1</sub>の場合には、さらにステップ411でカウンタCの値が所定値C<sub>1</sub>以下か否かが判定される。

【0044】ステップ411でC ≤ C<sub>1</sub>の場合には、NO<sub>x</sub>吸収剤再生終了後短時間で下流側NO<sub>x</sub>濃度がN<sub>1</sub>まで上昇しており、NO<sub>x</sub>吸収剤が劣化したと考えられるため、ステップ413に進みアラームフラグALMの値を1にセットしてルーチンを終了する。また、ステップ411でC > C<sub>1</sub>の場合には下流側NO<sub>x</sub>濃度の上昇

が遅く、NO<sub>x</sub> 吸収剤は正常に機能していると考えられるため、アラームフラグALMの値はそのままにしてルーチンを終了する。

【0045】なお、アラームフラグALMの値が1にセットされると、別途制御回路30により実行される図示しないルーチンにより、例えば警報が作動され運転者にNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化が報知される。また、図2には図示していないが、制御回路30にメインスイッチを切っても記憶保持可能なバックアップRAMを設け、点検、修理のためにこのバックアップRAMにフラグALMの値を記憶するようにしても良い。なお、上記所定値N<sub>1</sub> 及びC<sub>1</sub> の値は、NO<sub>x</sub> 吸収剤の種類、サイズ等により異なってくるため、実験等により決定することが好ましい。

【0046】図5はNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化判定ルーチンの別の実施例を示す。本ルーチンも制御回路30により一定時間毎に実行される。図4の実施例では、NO<sub>x</sub> 吸収剤再生終了後に下流側NO<sub>x</sub> 濃度が所定値N<sub>1</sub> に上昇するまでの時間により劣化の有無を判定していたが、本実施例ではNO<sub>x</sub> 吸収剤再生終了後の下流側NO<sub>x</sub> 濃度の増加曲線が変曲点に到達するまでの時間を検出することによりNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化を判定している。

【0047】図1(C) に示したように、再生終了後のNO<sub>x</sub> 吸収剤下流側のNO<sub>x</sub> 濃度は、ある時点から上昇を始め、NO<sub>x</sub> 吸収剤のNO<sub>x</sub> 吸収量が飽和に近づくにつれて一定値に漸近するようになる。このため、再生終了後の下流側NO<sub>x</sub> 濃度の増大速度は最初は大きく、次いで小さくなるため下流側NO<sub>x</sub> 濃度の変化曲線には変曲点(図1(C) のA点)が存在する。そこで、本実施例では再生終了後、下流側NO<sub>x</sub> 濃度の増加速度が負になって、且つ下流側NO<sub>x</sub> 濃度が所定値以上である状態が生じるまでの時間により、NO<sub>x</sub> 吸収剤18の劣化の有無を判定している。

【0048】図5において、ルーチンがスタートすると、ステップ501から505では、図4、ステップ401から403と同様にカウンタCの操作が行われる。また、ステップ507から513では、下流側NO<sub>x</sub> 濃度の増加速度の変化率が演算される。すなわち、ステップ507ではNO<sub>x</sub> センサ20からNO<sub>x</sub> 濃度NRが読み込まれ、ステップ509では前回ルーチン実行時のNO<sub>x</sub> 濃度NR<sub>i-1</sub> を用いて、NO<sub>x</sub> 濃度の増加速度DNRが、 $DNR = NR - NR_{i-1}$  として計算される。

【0049】また、ステップ509では、ステップ507で算出した増加速度DNRと、前回ルーチン実行時の増加速度DNR<sub>i-1</sub> とを用いて、NO<sub>x</sub> 濃度増加速度の変化率D2NRが、 $D2NR = DNR - DNR_{i-1}$  として計算され、ステップ513では、次のルーチン実行に備えてNR<sub>i-1</sub> とDNR<sub>i-1</sub> の値が更新される。次いで、ステップ515から519では、NO<sub>x</sub> 濃度NRと上記により計算したD2NRとの値からNO<sub>x</sub> 吸収剤1

8の劣化の有無が判定される。すなわち、D2NRがゼロまたは負(ステップ515)、NRが所定値N<sub>1</sub> 以上(ステップ517)となったときに再生終了からの経過時間がC<sub>1</sub> 以下の場合にNO<sub>x</sub> 吸収剤18が劣化したと判定され、ステップ521でアラームフラグALMがセット(=1)される。他の操作は図4と同様であるのでここでは説明を省略する。

【0050】ところで、上記実施例では、NO<sub>x</sub> 吸収剤再生終了後の下流側NO<sub>x</sub> 濃度変化のみに基づいてNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を検出していたが、NO<sub>x</sub> 吸収剤下流側のNO<sub>x</sub> 濃度は、NO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の状態が同じであっても、NO<sub>x</sub> 吸収剤に流入する排気のNO<sub>x</sub> 濃度が増加すれば、それに応じて変動する。すなわち、機関運転条件の変化などにより、NO<sub>x</sub> 吸収剤に流入する排気のNO<sub>x</sub> 濃度が増減すれば下流側のNO<sub>x</sub> 濃度もそれに応じて増減することになる。このため、下流側のNO<sub>x</sub> 濃度のみに基づいてNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を判定したのでは、機関運転条件の変化などにより誤判断を生じるおそれがある。そこで、以下に説明する実施例では、下流側NO<sub>x</sub> 濃度に加えてNO<sub>x</sub> 吸収剤上流側NO<sub>x</sub> 濃度も検出し、これらのNO<sub>x</sub> 濃度の関係の変化に基づいてNO<sub>x</sub> 吸収剤の劣化の有無を判定している。

【0051】図6は、NO<sub>x</sub> 吸収剤の上流側と下流側のNO<sub>x</sub> 濃度に基づくNO<sub>x</sub> 吸収剤劣化判定を行う排気浄化装置の構成の一例を示す、図2と同様な図である。図6において、図2と同様な要素は同一の参照符号で示している。図6の実施例では、NO<sub>x</sub> 吸収剤18の上流側の排気通路に、下流側のNO<sub>x</sub> センサ20と同様なNO<sub>x</sub> センサ25が設けられている点が図2の実施例と相違している。また、図7は図6の排気浄化装置のNO<sub>x</sub> 吸収剤劣化判定ルーチンの一例を示す。本ルーチンは制御回路30により一定時間毎に実行される。

【0052】図7のルーチンでは、再生終了後のNO<sub>x</sub> 吸収剤上流側NO<sub>x</sub> 濃度と下流側NO<sub>x</sub> 濃度との差が所定値以下になるまでの時間に基づいてNO<sub>x</sub> 吸収剤18の劣化の有無を判定する。NO<sub>x</sub> 吸収剤の上流側NO<sub>x</sub> 濃度と下流側NO<sub>x</sub> 濃度との差は、すなわちNO<sub>x</sub> 吸収剤に実際に吸収されたNO<sub>x</sub> 量を表すためNO<sub>x</sub> 吸収剤上流側と下流側のNO<sub>x</sub> 濃度差を監視することにより、上流側のNO<sub>x</sub> 濃度の変動にかかわらずNO<sub>x</sub> 吸収剤の吸収能力の変化を検出することができる。

【0053】図7においてルーチンがスタートすると、ステップ701から705では図4、ステップ401から405と同様なカウンタCの操作が行われる。次いで、ステップ707と709では下流側NO<sub>x</sub> センサ20と上流側NO<sub>x</sub> センサ25とから、それぞれ下流側NO<sub>x</sub> 濃度NRDと上流側NO<sub>x</sub> 濃度NRUとが読み込まれ、ステップ711では上記により読み込んだNRDとNRUとの差ΔNRが計算される。

【0054】次いでステップ713ではΔNRが所定値



$\Delta NR_i$  以下か否かが判定される。 $\Delta NR > \Delta NR_i$  である場合、すなわち下流側  $NO_x$  濃度が上流側  $NO_x$  濃度に較べて十分に低い場合は  $NO_x$  吸収剤 18 の吸収能力がまだ低下していないため、そのままルーチンを終了する。一方、 $\Delta NR \leq \Delta NR_i$  である場合には  $NO_x$  吸収剤 18 の  $NO_x$  吸収能力が所定値以下に低下しているため、ステップ 715 でカウンタ C の値が  $C_i$  以下か否かを判定する。また、ステップ 715 で  $C \leq C_i$  の場合は、 $NO_x$  吸収剤の吸収能力の低下が短時間で生じており、 $NO_x$  吸収剤 18 が劣化したと考えられるため、ステップ 717 に進みアラームフラグ ALM をセット (=1) してルーチンを終了する。なお、上記所定値  $\Delta NR_i$  及び  $C_i$  の値は  $NO_x$  吸収剤の種類、サイズ等により異なり、実験等により決定することが好ましい。また、図 7 の他の操作は図 4 のルーチンと略同様なので、ここでは説明を省略する。

【0055】上記実施例では、上流側  $NO_x$  濃度と下流側  $NO_x$  濃度との差  $\Delta NR$  を監視することにより、 $NO_x$  吸収剤の吸収能力を判定しているが、濃度の差  $\Delta NR$  以外のパラメータを用いて  $NO_x$  吸収剤の吸収能力を判定することも可能である。例えば、下流側  $NO_x$  濃度  $NR_D$  と上流側  $NO_x$  濃度  $NR_U$  との比  $RNR = NR_D / NR_U$  により  $NO_x$  吸収剤の吸収能力を判定することも可能である。すなわち、上記濃度比  $RNR$  は、流入する排気中の  $NO_x$  のうち吸収されずに下流側に流出する  $NO_x$  の割合を表すため、濃度比  $RNR$  が増大した場合は  $NO_x$  吸収剤の吸収能力が低下したことを意味している。そこで、濃度の差  $\Delta NR$  が所定値以下になるまでの時間を検出する代わりに、上記濃度比  $RNR$  が所定値  $RNR_i$  (例えば 0.8 程度) 以上になるまでの時間を検出することにより  $NO_x$  吸収剤の劣化の有無を判定してもよい。

【0056】図 8 は濃度比  $RNR$  による  $NO_x$  吸収剤劣化判定ルーチンのフローチャートを示す。図 8 のルーチンでは、 $NO_x$  吸収剤下流側と上流側の  $NO_x$  濃度の比  $RNR$  を計算し (ステップ 811)、 $RNR$  が所定値  $RNR_i$  以上 (ステップ 813) になったときに再生終了時からの経過時間 C が所定値  $C_0$  以下である場合に (ステップ 815)、 $NO_x$  吸収剤 18 が劣化したと判定してアラームフラグ ALM をセット (=1) している。なお、図 8 の他のステップは図 7 のルーチンと略同様であるためここでは詳細な説明は省略する。

【0057】ところで、図 6 から図 8 の実施例では  $NO_x$  吸収剤 18 の上流側排気通路に設置した上流側  $NO_x$  センサ 25 により、 $NO_x$  吸収剤 18 の上流側の  $NO_x$  濃度を検出していたが、 $NO_x$  吸収剤の上流側  $NO_x$  濃度は、すなわち機関から排出される排気ガス中の  $NO_x$  濃度である。また、機関から排出される排気ガスの  $NO_x$  濃度は機関負荷と吸入空気量などの機関運転条件により決定される。そこで、上記のように  $NO_x$  吸収剤 18

上流側に  $NO_x$  センサ 25 を設けずに機関運転条件から  $NO_x$  吸収剤上流側の  $NO_x$  濃度を算出することも可能である。

【0058】この場合、予め機関吸気圧力 PM (すなわち機関負荷) と回転数 N (すなわち吸入空気量) とを変えた条件下で機関の排気中の  $NO_x$  濃度  $RNU$  を実測して、吸気圧力 PM と回転数 N との関数として、 $NO_x$  濃度  $RNU$  を図 9 に示すような形式の数値テーブルの形で制御回路 30 の ROM 32 に格納しておき、図 7 ステップ 709 と図 8 ステップ 809 では、 $NO_x$  センサ 25 から  $NO_x$  吸収剤 18 上流側  $NO_x$  濃度を読み込む代わりに、吸気圧センサ 15 と回転数センサ 21 とから、それぞれ機関吸気圧 PM と機関回転数 N とを読み込んで、ROM 32 に格納した図 9 の数値テーブルから上流側  $NO_x$  濃度  $RNU$  を読み出すようにすれば良い。

【0059】このように、機関運転条件から  $NO_x$  吸収剤上流側の  $NO_x$  濃度を算出するようにすることにより、 $NO_x$  吸収剤上流側の  $NO_x$  センサ 25 を省略して装置を簡素化することが可能となる。

【0060】

【発明の効果】請求項 1 から 3 に記載の本発明によれば、再生終了後の  $NO_x$  吸収剤下流側排気中の  $NO_x$  濃度の変化を監視することにより、従来困難であった  $NO_x$  吸収剤の劣化検出を容易に行うことが可能となる。また、請求項 4 から 8 に記載の本発明によれば、再生終了後の  $NO_x$  吸収剤上流側と下流側の排気中の  $NO_x$  濃度を監視することにより、機関運転条件の変化にかかわらず正確に  $NO_x$  吸収剤の劣化を検出することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】本発明の  $NO_x$  吸収剤の劣化検出方法を説明する図である。

【図 2】本発明の排気浄化装置を適用する内燃機関の一実施例の概略図である。

【図 3】 $NO_x$  吸収剤の  $NO_x$  の吸放出作用を説明する図である。

【図 4】図 2 の実施例の  $NO_x$  吸収剤の劣化検出操作の一例を示すフローチャートである。

【図 5】図 2 の実施例の  $NO_x$  吸収剤の劣化検出操作の一例を示すフローチャートである。

【図 6】本発明の排気浄化装置を適用する内燃機関の他の実施例の概略図である。

【図 7】図 6 の実施例の  $NO_x$  吸収剤の劣化検出操作の一例を示すフローチャートである。

【図 8】図 6 の実施例の  $NO_x$  吸収剤の劣化検出操作の一例を示すフローチャートである。

【図 9】機関排気中の  $NO_x$  濃度を表す数値テーブルの形式を示す図である。

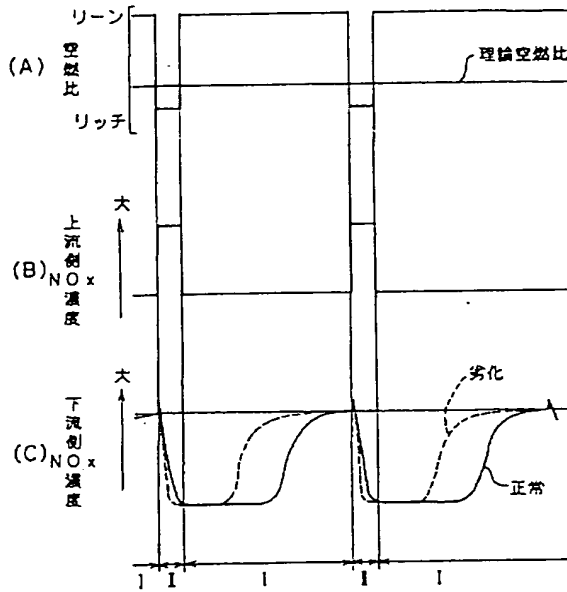
【符号の説明】

1…内燃機関

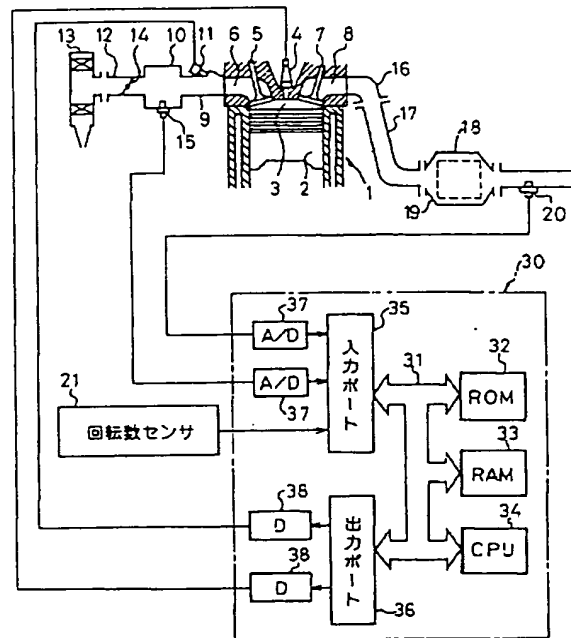
17…排気通路  
18…NO<sub>x</sub> 吸収剤

20、25…NO<sub>x</sub> センサ  
30…制御回路

【図1】



【図2】

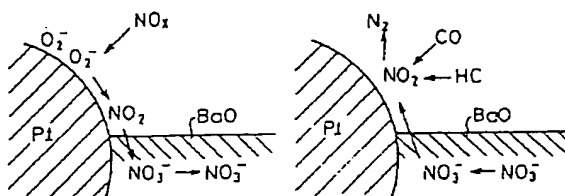


1…内燃機関 20…NO<sub>x</sub> センサ  
17…排気通路 30…制御回路  
18…NO<sub>x</sub> 吸収剤

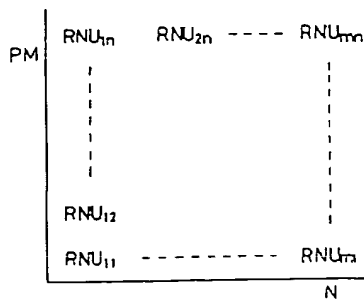
【図3】

(A)

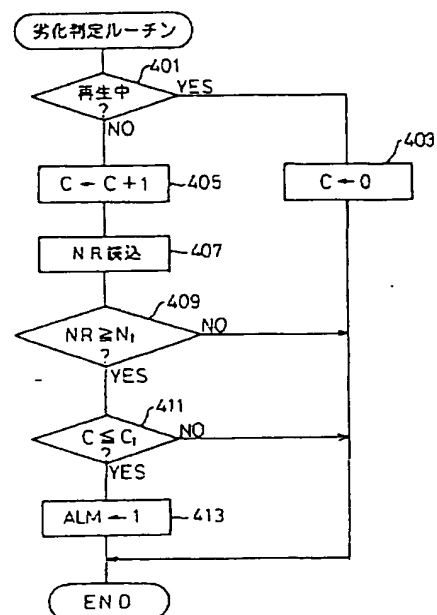
(B)



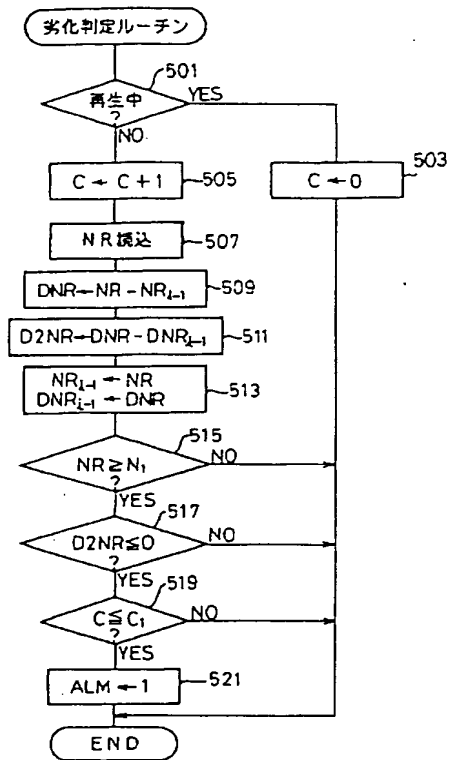
【図9】



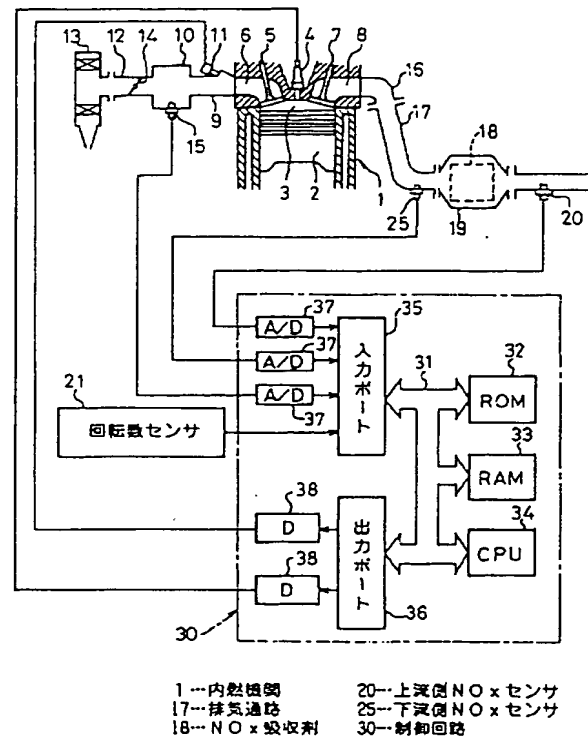
【図4】



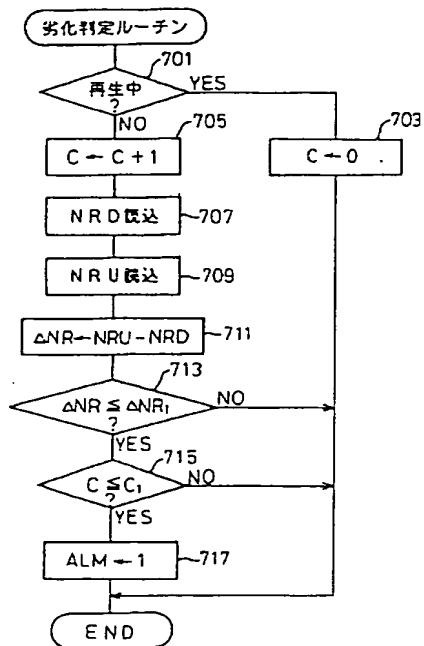
【図 5】



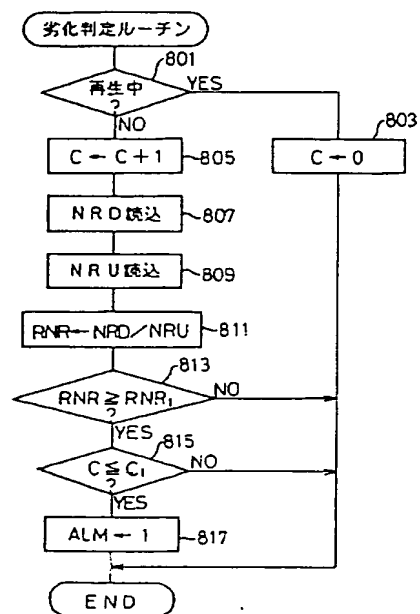
【図 6】



【図 7】



【図 8】



フロントページの続き

(72)発明者 井口 哲  
愛知県豊田市トヨタ町1番地 トヨタ自動  
車株式会社内